ぶんじライブラリー

国分寺高校図書館だより　　２０１８．５月号

★第一定期考査も終わって、みなさん一息ついているところでしょうか？たくさんの生徒が試験勉強しにきて、図書館は席が足りないほどでした。

★４月から考査終了までで、最もブンジ生に貸出されたのは、「孤城の鏡」（辻村深月/著）でした。本屋大賞をとった話題性はすごいですね！予約もできますので、本棚になくてもカウンターで聞いてくださいね！

科学道１００冊特別展示

図書館の奥壁面書架で、「科学道１００冊」特別展示をしています。理化学研究所が選んだ、見て楽しく美しい本、科学とは何か・人類はどこに行くのかなど考えさせられる科学の本が集まっています。一度、覗いてみてね。

今月の新着図書より

新着図書の中から司書がおススメする本を紹介します。

『理科系の読書術』
鎌田浩毅/著
中公新書

著者の鎌田氏は、京大大学院人間・環境学研究科の教授。京大の学生でも本を読むのが苦手という人が少なくないことから、効率的な読書法を伝授する目的で書かれた新書だ。

著者は、読書には、推理小説などのように最初から読むべき「音楽的な読書」と、どこから読んでどこでやめても構わない「絵画的な読書」があると言う。この本では「絵画的な読書」で、細切れでも知識を積み重ねることに重点をおいている。この他にも、目次を読む、目的を決めて本を読む、棚上げする方法や、入門書の選び方など、いかに効率的に本を読み、自分の知識とする技術がたくさん詰め込まれている。幅広い読書は、チャンスをつかむための触媒だとも著者は言う。

君たちは、本は最初から最後まで読まねばならないと刷り込まれていないだろうか？それは、小・中学生の時に「読書」＝「小説を読む」ととらえているからだと司書は思う。高校・大学以上の読書は、新たな知識と出合うための読書だ。「理科系の」とこの本で銘打っているように、論理的な読書法を身に着けられればこれからの学びの大きな武器となる。読書の訓練だと思って、この本を読みたいとこだけ読んでみてはどうだろうか？